

だれでも簡単に 猫の便秘を予防する 管理のポイント



どうぶつの総合病院 専門医療&救急センター 内科 福島 建次郎 先生

猫にとって理想的な便性状と排便頻度

〈便性状を確認するポイント〉

はじめに便性状について述べると、性状確認のために糞便のスコアリングをつける意識をもっておくことは非常に重要である。動物病院の診療録でも、便が硬い、軟らかい、下痢といった主観的かつ曖昧な記載が多く、数値化して記載しているものはあまり目にする機会がない。糞便の硬さは主観的な情報のため、スコアリングによって可能な限り客観的データに落とし込むことは情報の共有という意味でも重要である。単に軟便との記載よりもスコア3もしくは4と記載があるほうが正確性は格段に上がるものと思われる。

筆者は画像付きスコアリングの資料を使用しながら飼いに説明しているが、残念ながら普及しているとはいえないため、ここで改めて紹介したい(表1)。

〈筆者の各スコアのイメージ〉

- スコア1: パサパサに乾いた石のような硬さの糞便で、非常に乾燥している。強風によりころころと転がるような、粘り気のない、つぶすと土くれが割れたような感じの便であり、脱水した猫や巨大結腸症の猫に認められる。
- スコア2: くびれが認められ、表面も中身もかなり乾燥した状態である。崩すとぼろぼろと土くれが落ちてくるようなイメージである。
- スコア2.5: 理想的な便とされており、丸太状の形をしていて、適度なくびれが認められる。水分が含まれ、押すとぐしゃっとつぶれ、つまみ上げるとかすかに地面に跡が残るような便である。
- スコア3: ソフトクリーム状より若干硬いくらいの便で、形は保っているが非常に軟らかく、くびれがなく、持ち上げると地面についてしまう便である。
- スコア4: 溶けかけのソフトクリーム様で、簡単にとれないレベルである。
- スコア5: 水様下痢で、かすかに構造物が認められるような便である。



この観察に際し大切なことは、時間の経過により便の乾燥がすすみ、スコアが低いほうに傾いていくことを考慮することである。可能であれば、猫の排便後ただちに便性状をチェックして評価することが望ましい。

〈排便頻度を確認するポイント〉

次に排便頻度であるが、排便は1日1~3回の頻度が正常とされており、排便が2~3日認められない場合は注意が必要である。猫の飼い主の多くは猫砂から便をすくってピックアップするため、排便の1日当たりの回数を把握している方は多いと思うが、排便頻度の減少については日々の健康チェックの一環として確認しておきたいポイントである。

便秘の問題点

軽度の便秘自体が原因で臨床症状を引き起こすことはほとんどないが、便秘が慢性化し重症化してくると、排便時の疼痛、食欲不振、全身状態の悪化等につながる。また便秘が慢性化すると巨大結腸症などのリスクにつながると考えられているため、早期の段階で便秘に気づき、問題点として認識して対処することが重要である。

最近では慢性腎臓病猫では健常猫と比較して排便頻度が



表1

糞便スコア 猫用



評価方法

便を個別に1(形があって乾燥している)から5(液状)で評価します。便の硬さが不均一なときは高いほうのスコアを記録します。

▶ **硬すぎる／軟らかすぎる** ▶ **許容範囲内** ▶ **最適**

1



硬くて乾燥した砕けやすい便

フォークで便を崩したとき、フォークの跡が残らない。押しつぶされるのではなく、バラバラに砕ける傾向がある。

2



形のある硬い便

この便には非常にはっきりしたひび割れがある。外側は非常に乾燥していて、内側はほぼ乾燥している(より軟らかいスコア2.5の便とは異なる)。上からフォークを押し付けると、ひび割れに沿って砕けてバラバラの小さな断片となる。拾い上げたとき、地面に跡が残らない。

2.5



形のあるしっかりした便

この便にははっきりとした形があり、ひび割れが見える。その表面はわずかに湿っている場合があるが、まだ十分に形は保っている。上からフォークを押し付けると、便は崩れるがスコア3の便と違ってやや抵抗を感じる。拾い上げたとき、地面にほんの少し跡が残る。

3



少し形のある軟らかい便

ひび割れのない湿った便。スコア4の便と比べると、まだ明らかな形がある。便の各内容物は互いに密着している。拾い上げたとき、地面に跡が残る。

4



非常に軟らかい便

水分が多いが液状ではない便。スコア5の便と比べると、様々な異なる内容物が含まれており、その構成物が水分を保持しているように見える。

5



液状の便

完全に液状の便(構造物なし)、またはわずかに構造物が残っている液状便。

有意に低いとする報告や非外傷性の腰仙椎異常を有する猫では結腸サイズが大きい症例が有意に多いとする報告^[1, 2]があり、軽度の便秘でもこれらのリスクファクターが重なることで重症化するケースもあり得る。

我々のような2次診療施設では便秘のコントロール不良として紹介されてくるケースもある。便秘で来院する患者のなかには難治性で重症の症例もあり、腹部を触診すると数センチにもなる硬結した結腸が触知できたり、X線で腹腔内が乾燥し、硬結した糞便で満たされている様子が把握できたりする場合もある。

注意すべき症状や評価ポイント

〈便秘のリスクが高い猫の特徴〉

まず、外的な要因として、骨盤の形態異常（先天性あるいは骨盤骨折などによる狭小化）などの物理的な障害や排便を支配する神経系の障害（腰仙椎の損傷、脊髄損傷など）により、排便の機能障害が生じている場合などが考えられる。たとえばマンクスという品種はもともと尾が短い、あるいはない品種だが、この品種では尾側仙椎の形成不全や無形成により、排便機能や排尿機能に異常が生じやすいことが知られている。

内科的要因としては脱水をおこしやすいような疾患、例えば慢性腎臓病やコントロール不良の糖尿病などでは、便秘そして巨大結腸症のリスクは上昇するものと思われる。なお、猫の巨大結腸症は6割が特発性といわれており、その多くは原因不明である。

また、肥満もリスクファクターとして挙げられる。逆に年齢については、論文では猫の巨大結腸症は中年齢に多いとされているが若齢でも発症することもあり、全年齢で考慮すべきだと考える。



そして、便秘の危険因子として消化できない異物の摂取も挙げられる。長毛種の猫ではグルーミングによる毛玉などが便秘の要因となることがある。

〈便秘にともなう特徴的な行動変化や症状〉

便秘を示唆する特徴的な行動変化として、排便姿勢をくり返す様子、排便時に疼痛により悲鳴を上げる、いきんで吐いてしまう、排便努力をくり返すが少量の水様の粘液しか出ないなどが挙げられる。睡眠には影響が少ないようだが、便秘が長期継続すると排便自体をしなくなり、次第に全身状態が悪化する。

〈飼い主が気づく自宅での観察ポイント〉

先述の通り、糞便の回数を把握している飼い主は相対的に頻度の減少に気づくことが多いわけだが、放任主義または多頭飼育の飼い主はなかなか便秘の初期の徴候に気づかない場合も多い。トイレを整える際に意識的に日記などの記録をつけていただくように指導するとよい。排便頻度のほか、砂がまったくつかないような乾燥した便が連続して排便されるなどの性状もチェックしたいところである。たとえばスコア1・2の便は砂が付着しにくいので、便をもち上げたときに砂がどれくらい付着しているかを基準にすることができるかもしれない。

とくに飼い主に気づいてほしいポイントは、排便の動作をくり返す場合で、たとえば短時間の間に複数回あるいは複数のトイレに入り、排便努力をすることが出ないような場合は、便秘の初期症状に気づくポイントになり得る。最近、カメラ付きの猫用トイレもあり、ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）を活用することで便秘の早期発見がより容易になる可能性も考えられる。

きれいなトイレでないと排便しない猫もいるので、トイレの砂をこまめに交換することや、複数のトイレを準備してあげることも便秘を予防するためには重要である。近年、自動で砂を交換するトイレなどもあるため、家を不在にすることが多いご家庭では、このようなトイレを導入することにより、猫のトイレに関するストレスを軽減し、排泄を促してあげることも重要である。

獣医師側ができることとして、健康診断で問診の際に排便頻度や便性状を毎回聴取し、ご家族に猫の排便頻度や便の性状に対する意識づけを行っていくこと、スコアリングシステムを用いてできるだけ客観的な情報をカルテに記録していくことが重要である。

便秘に対する内科療法の考え方

〈重度の症例の場合〉

便秘が持続し、重症化、とくに巨大結腸症にまで至って

